



ユネスコエコパーク通信

コラム

カイツブリ

ため池や流れの緩やかな川にすみ、せわしく水中に潜っているヒョドリほどの大きさの鳥。水を「かいて潜る」ことからこの名前が付いたと言われるほど、水中に潜るのが上手です。一度の潜水で15〜30秒ほど潜ることができ、魚やエビなどを上手に捕まえて食べます。

水辺近くの水生植物を使って巣を作り、春から秋にかけて卵を産みまします。卵からかえったヒナは、泳ぎ方やエサのとり方を覚えるまでの約2カ月間、親と一緒に暮らします。疲れたヒナを親が背中に乗せているほほえましい姿を見ることもありますが、それだけ川で生きていく術を身に付けるのはたいへんなのかもしれない。



「地域おこし協力隊

つれづれ日誌



先日、とある調査で川中キャンプ場へ行ったときのこと。目当ての調査対象になかなか巡り会えず、これはもう無理か…と早々にあきらめ、ほかの調査員と付近の散策をしていました。ちょうどその辺りは広場になっていて、コケ類やシダ類が繁茂する日当たりのよい場所なのですが、ひとりの調査員が「わっ！危なっ！」と、とっさにジャンプして「それ」を避けました。

避けた本人は一瞬、それを「ヒトの排せつ物（固形）」と思ったらしく、踏みそうになったので避けたわけなのですが、よくよく見るとそれは、なんと「ニホンマムシ」。毒性だけで言えば奄美大島や沖縄などに生息するハブよりも強いと言われています。毒の注入量が少ないためにハブよりも毒性が弱いと思われがちですが、侮ってはいけません。

これからの季節、行楽で山に入る人も増えると思います。ニホンマムシもそうですが、オオスズメバチやマダニなど危険生物の活動が、冬眠を控えて活発になる時期です。これらの危険生物は、外敵がある一定の距離に近づいてくると「警告音」を発します。オオスズメバチなら「カチカチカチ」とアゴを鳴らす音、ニホンマムシの場合は、尻尾の先を震わせながら「ジジジジ…」というハチの羽音みたいなものです。これらの音が聞こえたら無視することなく、周りを注意して見渡してくださいね。

綾町地域おこし協力隊 すぎもと 杉本 だい 大